

国際研修参加への4つのハードル

理事長 竹内 和利
1994年インディアナポリス

昨年10月末、京都で開催のNPO法人設立記念講演会で、冒頭のご挨拶に続くCIFジャパンの紹介の折に簡単に触れさせて頂きましたが、国際研修参加には現状、参加希望者には、越えねばならないハードルがあるように思われます。そのハードルについて思うところを述べてみましょう。

(1) ハードル1：内向きの日本社会・日本人

米国の大学に留学する日本人の数が中国人、韓国人に比して減少していることが、ここ数年報じられています。また先日、朝日新聞紙上で論説員が触れていましたが、近頃は外務省や商社でも、国外に赴任することを躊躇する傾向があるとのことです。

日本人が外国に出向きたがらないのは、270年ほどにも及ぶ鎖国がもたらした心性によるのか、「稲作の遺伝子」によるものなのか、「集団が内側に向かって閉じる」(広井良典「コミュニティを問いなおす」という傾向は、とりつく島がなさそうにみえます。勿論例外は現れます。昨年、卒業を控えた大阪の男子学生が、独りシルクロード横断の際にキルギスで当地のCIF代表に出会ったと言って、メールで面会を申し出てきました。現在この青年は米国の大学に留学中で、将来は日本の教育のために貢献したいとの夢を語っておりました。この青年の話聞いていて、思わず幕末に禁令に背いて脱藩し、外国に秘かに渡航した新島襄や幕末の志士のことを想いました。時代と状況を異にしますが、外国に学ぶ好奇心と熱をもった若者の輩出を願いたいものです。

(2) ハードル2：ことばの壁・・・英語・外国語への苦手意識

先日もCIPプログラムに参加の問い合わせがメールで寄せられました。質問の末尾に、「研修中、自分は通訳を伴わねばなりません」とのコメントが付されていました。折角外国研修への期待を抱きはしたものの、英語の壁に頓挫するケースも多いのではと思います。「日本の英語教育は100年

の失敗！」と喝破された先生もおられますが、日本人の悩みの種は外国語による円滑なコミュニケーションです。社会福祉学専攻の大学生には英語の習熟に無関心な傾向はないでしょうか。自分ももとよりですが、英語や外国語の習得にはいろいろな手段を講じて、努力し続ける運命にあるような気がします。

(3) ハードル3：お金の問題・・・研修参加者への助成を

かつて全社協主催の折には、CIP研修参加には〇〇振興会から頂いた助成金を旅費、研修費に充てることができました。現在は応募者による全額自費参加となっています。ドルもユーロも日本円対比では安くなっているとはいえ、負担が多いことは否めません。NPO法人として、助成金や寄付金の途を求めねばならないと思います。助成可能な団体についての情報をお持ちの方は是非お知らせ願います。

(4) ハードル4：国際研修への職場の理解を

福祉、医療の現場では人手不足があれば尚更のこと、普段に全職員の勤務が不可欠でありましょう。多忙な現場から独り抜け出して外国研修に行くには勇気が要るかも知れません。そして同僚の理解を得ることや留守中の処置などもさることながら、職場や業界の将来を担う有為なひとの育成のために、経営者はじめ職場の一層の理解が望まれるところです。近年、日本のスポーツ界は、実力のある選手が海外で活躍することに大いに寛大で、外国に選手を送り出すことが誇りでさえあるようです。ときに先頃、サッカーのザッケローニ監督がテレビ・インタビューに答えて、「日本選手が外国チームで活躍する機会があれば大いに出かけて欲しい。歓迎します。将来、外国でプレーした選手が日本にいろいろな文化を持ち帰ってくることは、日本で活躍するチームや選手に、とってもためになるはずですよ」と語っておられました。医療や福祉の職場の経営者や現場の上司は、ザッケローニ監督のような太い腹と事業に対する遠望をもって頂きたいと願わずにはられません。

(京都府在住)



「大震災」と「CIPの友」

坂本 正路
1971年コロンバス

今回の大震災直後、CIPのベルギーの友人から1通の手紙を受け取りました。

「親愛なるミチ（正路）とセツコ（節子）へ
あなたの国で起こった今回の出来事に、私も回りの者も深く心を痛めています。新聞は日本人が勇気と忍耐を持って行動していることを伝えていますが、私はしばらくあなたをどのような形で助けられるのかを考えました。そして一つの答を見つけましたのです。ご存じの通り、私の家はそんなに大きくはありませんし、豊かでもありません。しかし、もし、こちらに来られるのであれば、私はあなた方をお助けしたいのです。どうぞ我が家に滞在して下さい。私はあなたとあなたの国と日本の人々の事を深く心に留めています。

アン・マリー（Anne Marie）」

手紙の主、アン・マリーは今から40年前（1971年）にオハイオ州コロンバスで一緒にCIPのプログラムに参加した29名の研修生の一人でした。彼女とはクリスマスカードを交換するだけのつながりでしたが、2002年に妻節子とヨーロッパの旅を計画した際、訪ねることが出来ました。ブリュッセルから車で南へ1時間ほどの丘

に囲まれたのどかな村にひとりで住んでいました。

彼女の家のテラスからは下になだらかに広がる林が見えていました。部屋は7部屋ほどあったでしょうか。彼女はパソコンもFAXも持たず、自然を愛する生活を満喫していました。毎年夏には、かつて彼女がNPOで働いていたアフリカの国から友人が訪ねて来て滞在するのだと言っていました。

私は彼女の家を思い出しながらアン・マリーの親切を感謝せずにはおられませんでした。何故なら彼女の決断の大きさと早さに驚かされたからです。と言うのも、普段、彼女のクリスマスカードは翌年の1月末か、時には2月初めに届くほどののんびり屋なのに、今回は震災後、時を移さず手紙を送ってくれたからです。私はアン・マリーの他にもドイツのシュミット（1971年コロンバス）や他に2人のホストファミリーからも、直後に安否を尋ねるメールを受け取りました。CIPを通して与えられたこのような友のあることを有り難く思うとともに皆様にもお伝えしたいと思い書かせていただきました。ちなみにアン・マリーからの2011年のクリスマスカードは元旦現在、届いていません。

（神奈川県在住）



アン・マリーの家。左の木立の中にも部屋が続いている。

《キプロス大会マーケット出品報告》

昨年9月に行われたCIFキプロス大会のマーケットに日本からも出品したことはご存じだと思います。マーケットの収益は発展途上国からの参加者への旅費補助に用いられるもので、日本は過去2回のマーケットでは、トップクラスの収益を寄付することが出来ていました。

今回のキプロス大会には日本からの参加者はありませんでしたが、マーケットにだけは参加することを願って、皆様に日本的な品物を中心に献品をお願いしましたところ、数々の品物が集まりましたので、キプロスに送付いたしました。

このほど売上金の報告があり、55ユーロ（5500円）の売り上げがあったとの報告を受けました。残念ながら品物が残ってしまったとのことで、それは彼の地の恵まれない子どもたちのためのバザーに出品するという事です。皆様方のご協力に感謝して、ここにご報告いたします。